鳥取大学と附属学校園の連携と共同研究

岸本　覚 ・ 小玉芳敬

1. はじめに

鳥取大学附属学校園は、幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校の 4 校園で構成され、いずれも鳥取キャンパス内や徒歩 15 分圏内にある。鳥取大学教育地域科学部附属学校園は、2004 年の地域学部への改組にともない、鳥取大学附属学校部となった。

それ以来、鳥取キャンパスにある 3 学部（地域学・農学・工学）の教授が、校園長や附属学校部長を兼務で担ってきている。キャンパスに隣接することから、校園長・附属学校部長は、常勤状態に限りなく近い。大学附属学校となってからは、4 学部（地域学・農学・工学・医学）の大学教員が、附属学校園の教育に寄与する機会が増えた。

教育実習では、教育実習事前指導（中高・理科）等で、附属中学校の理科教員から学生に講義をしていただいたり、逆に、実習学生の研究授業を大学教員が参観に出向き、助言を行ったりしている。

2. 鳥取大学と附属学校園との連携事業と共同研究

附属学校園との連携は、全学としては、まず附属小学校との連携を「キャリアに拓く」というプログラムを通じて行っている。これは、1 年生から 6 年生までの全児童が自分の興味・関心を深める機会を提供するねらいで、たとえば鳥取大学の医学部や工学部、農学部、地域学部の教員が、大学で児童向けに実験実習等を提供している。学びの楽しさ・奥深さに関して、子供心を持った大学教員が熱心に語る姿を目にする。

次に、附属中学校と大学との連携としては、「大学学問体験　知の冒険」がある。2 年次の生徒が全 27 講座の中から、希望に応じて午前と午後に一つずつ受講する。一人一人が学ぶことの楽しさや喜びを経験し、日頃の学習や生活、進路選択に活かしてくれることをねらいとして続いている教育プログラムである。

附属幼稚園においても 3 学部から 5 名の大学教員が支援に当たり、農学部附属フィールドサイエンスセンターにおいては、毎年イモ掘り体験をさせていただいている。附属特別支援学校では特に専攻科において、大学で講義を受ける試みもなされている。

鳥取大学附属学校部となったことで、地域学部のみならず学内各部局との共同研究も行われている。最近8か年のおもな研究を表 1 にあげる。

まず、地域学部人間形成コースの教員は、毎年附属学校で行われている研究発表大会で研究協力として連携している。2024 年度は、7 月 5 日（金）、「令和6年度附属中学校研究発表大会」を開催し、「ともに広げ　ともに深める『やりくり』授業設計」を研究テーマとして掲げ、「他者と関わり合う力」と「当事者意識」を育むことをねらいとして授業公開を行った。午後からは東京大学・藤村宣之教授による「思考の多様性を活かし新しい価値を創造する授業づくり」を演題として講演を実施した。同年 7 月 6 日には附属幼稚園で公開研究会を実施し、「環境の再構成について考え、学び合おう」というテーマで演習を実施し、岐阜聖徳学園大学・西川正晃教授による「遊びの中の学び～夢中になって遊ぶ保育～」と題した講演を行った。

また、附属小学校では、11 月 1 日に「自律して学び続ける子供の育成」をテーマに研究発表大会を開催し、それぞれの科目で公開授業を実施し、大学教員が研究協力者として参加している。講演会では、桐蔭横浜大学・溝上慎一教授による「主体的・対話的で深い学びを確認して次期学習指導要領につなげる」を演題として実施した。

附属特別支援学校では、12 月からの公開研究会を予定しており、研究主題は、「6 歳から 20 歳までの「自

分づくり」を育む教育実践」で、神戸大学・津田英二教授の講演会を開催する。開催にあたっては、本学の地域学部国際地域文化コース・作田将三郎教授らによる事前の指導・助言などを行っている。

さらに、本学では 2017 年度より JST の次世代人材育成事業の一環として行われているジュニアドクター育成塾に採択された（事業は 2017 年度から 5 年間）。これは、附属学校をはじめとして本学全体で取り組んだもので、他機関とも連携をとりながら進めたものである。受講生・修了生の中には学会での発表や、専門誌への論文掲載などを行った者もおり成果をあげている。

表1. 鳥取大学における附属学校園を活用した研究（H.28 年～R.05 年）

学校種	研究者		研究期間	内　　容
	所属部局	氏 名		
幼稚園	地域学部	儀間　裕貴	R元年度	幼児期における運動能力と運動イメージ機能の関連
小学校	地域学部	溝口達也	H28年度以前から毎年度	R5.西尾教諭・大杉教諭がヨーロッパからの来客者に向けて授業公開（探究学習） 中四国算数・数学事務局
	教員養成センター	石本雄真	H30年度以降毎年度	「学校でのくらしアンケート」への協力
	教員養成センター	大谷直史	H25年度以降毎年度	視力に関するアンケート協力
	地域学部地域連携研究員	赤尾依子	H26年度以降毎年度	「T式ひらがな音読指導」データの協力
	工学部電気情報系学科	櫛田 大輔	H30年度以降毎年度	1) 授業中の生徒の動作頻度に基づく筆写行動の推定 2) 授業中の生徒の姿勢推定に基づく教室内の雰囲気(集中度)推定 3) 授業中の生徒の姿勢推定に基づく特異な行動の抽出
	医学部	植木　賢 藤井 太平(非)	R1年度以降毎年度	知財アンケート 「発明楽」「知財創造教育」 創造性育成教育の開発と小学校 5 年生に対して実践した効果
中学校	地域学部	溝口達也	H30年度以降毎年度	数学における授業実践 （研究大会における授業等）
	教員養成センター	石本雄真	H30年度以降毎年度	学校不適応の要因を探るための「学校でのくらしアンケート」の協力
特別支援学校	地域学部	中尾泰斗 渡邉正人	R5.9～R5.12	抽象画制作による発達支援 ～知的障がい者における主体性を自己決定の涵養を中心に～

3. 個別共同研究の事例

上記に掲げた以外にもさまざまな研究連携が行われている。例えば、理科教育学を専門にしている地域学部人間形成コース・泉直志准教授は、日本理科教育学会において附属中学校の服部和晃教諭・井殿加奈子教諭とともに授業実践の報告を共同で行い、その成果を発表している。主に観察や実験に関わる協働的な学びやメタ認知を発現させる学習環境・教材、科学的議論（アーギュメント）、プロセス・スキルズなどが主なテーマである。これらは前述した鳥取大学附属小学校研究発表大会（11 月）や鳥取大学附属中学校研究発表大会（7 月）で提案授業を行い、年度末に紀要にまとめ、成果として公開している。

次に、スポーツ科学、教育生理学が専門の地域学部人間形成コース・関耕二准教授は、継続的に附属中と附属小の体育、保健体育の教員と共同研究を実施している。ここ 4 年間では、中学校のマット運動・水泳などの学習意欲の「やりくり」授業の開発や、部活動に関わる調査、幼児期の運動能力と運動イメージ機能の関連について研究を進めている（以上は、『鳥取大学附属小学校研究紀要』『鳥取大学附属中学校研究紀要』等参照）。

地域学部人間形成コースの教員以外では、工学部電気情報系学科・櫛田大輔教授が、授業中の生徒の動作や姿勢をカメラ画像から画像処理により抽出し、生徒の筆写行動や集中度を見いだすという興味深い共同研究を実施している。授業実施者である小学校教諭が感じている児童の様子との比較検証がなされている。将来的には授業実施法の改善につながるような客観的データの提示につながることを期待している。

4. おわりに

このように附属小学校と附属中学校については、大学全体との企画連携もあれば、おもに人間形成コース学習科学（教科教育）の大学教員が、共同研究者として研究に取り組む形もあれば、指導助言者として授業実践にコメントする形もある。大学各部局の教員との共同研究は、今後もますますの拡大が望まれる。

大学附属の学校部になってから 20 年、鳥取大学は「大学として附属学校部を持っている」その意義を全学部の教職員で再認識し、附属学校の在り方、活用の仕方を自分事として捉え直す段階にある。

岸本　覚（鳥取大学地域学部長）・ 小玉芳敬（鳥取大学附属学校部長）